ずっと

まりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ずっと

【Ｎコード】
Ｎ７０５６Ｓ

【作者名】
まりん

【あらすじ】
毛利蘭はいつもと同じように学校に行っていた。そして・・・

いつもの朝

「コナンくん行くよ～」
私は毛利蘭。そして、彼は江戸川コナン君。半年前から家で預かっている。亜笠博士の親せきの子。
今は学校に行くところ
「おはようコナン君」と彼の友達の1人の歩美ちゃんがいう。そして、元太君
光彦君、哀ちゃんがきた。
「おはよう。みんな」と私たち2人がいう。「じゃあ、いってらしゃい。」
私はみんなと別れて帝丹高校にむかった。
学校に着いた。後ろから、「おはよう、蘭」と私の親友の園子が来た。「おはよう、園子」
その平和が壊れるとはいまはまだ思ってもみなかった。

いつもの朝（後書き）

こんにちは～初めてかきました。
すごい駄目文ですが
読んでくださった人ありがとうございます！

帰ってこない・・・

蘭が帰ってこない。もうとっくに夜の9時を回っている。
蘭の父親の毛利小五郎はそわそわしている。
あたりまえだ。蘭が帰ってこないのだから。
小「遅いな、蘭の奴」
コ「そうだね。」（蘭の奴一体どこにいるんだよ！）
小「探しにいってくる。」
コ「じゃあ、ぼくも行く。」
小「駄目だ。お前は寝てろ。」
コ「嫌だ！僕だって蘭姉ちゃんをさがしたいんだもん。」
小「は～わかったよ。その代わり俺からはなれんなよ?･!」
コ「うん！」
それから2人は蘭を探しに家を出た。

帰ってこない・・・（後書き）

ありがとうございました。遅れてすみません。
まだ学生なので更新が遅れるかもしれません。

誘拐された蘭

「ん・・・あれ？ここは？」
私は寒さのせいで目を覚ました。意識がはっきりしてくると、
この状況を整理しようとした。
「（確か・・・学校から帰る途中、黒づくめの男にいきなり薬か何
かを嗅がされて、意識が遠くなって・・・）」と思いながら、自分
は誘拐されたのだと思った。
それからしばらくして外から足音が近づいてきた。そして
ガラっ
「起きたか・・毛利蘭」
びっくりした蘭
そこにいたのは、あのトロピカルランドにいたあの黒づくめの１人
であった。
「あ、あなたは？誰なの？」
「フン、おまえには知らなくていいことさ。」
「私をどうする気よ？」
「おまえには、実験台になってもらうのさ」
「実験台？なんのよ！」
「記憶を消す妙薬だ」
「記憶を消す！？」

誘拐された蘭（後書き）

更新遅れてすいません。ついに黒の組織がでてきました。これからどうする！？コナン

記憶を失くした蘭

今、蘭はジンという男と話している。
蘭「な、なんで私なの？」
ジン「それは、おまえが一番工藤新一の関わりのある人間のなかで記憶をなくすことが容易だからだ。」
蘭「なんで、新一を？」
ジン「フッ。話は終わりだ。」
　　バタッ
蘭は金属の棒で頭を殴られて意識を失った。
「意外と簡単だったな。」
と言って薬を飲ませた。

蘭が薬を飲まされた2時間後探偵事務所では、1本の電話が入った
小「もしもし、えっ　　見つかった!?　　はいわかりました。すぐ行きます。」
コ「蘭姉ちゃん、見つかったの?!」
小「ああ。今から米花病院に行くぞ」
と言って、病院に向かった。
この後どんな過酷なことが起きるかも知らずに・・・

記憶を失くした蘭（後書き）

すみません。更新遅れてしまって。
感想お願いします。

私は・・・（前書き）

遅れてすみません

私は・・・

病院に運ばれた蘭は今、検査を受けている最中だ。
コ（蘭、よかった。後は犯人を捕まえるだけだ。）
　ガラっ
小「蘭は！？どうなんです！？」
医者「身体には異常はありません。ただ，，，」
小「ただ？」
医「蘭さんは、記憶を失っているのです」
小コ「記憶喪失ですか！？」
医「はい。」

病室
蘭「う・・ここは？」
小コ「蘭（姉ちゃん）！」
蘭「あなた達、誰？私は？」
小「そんな・・お前は、毛利蘭だ。俺は、父の毛利小五郎だ。」
コ「僕は、江戸川コナンだよ。」
蘭「そう。」
コ（蘭、なぜだ！？なにがあった？）

私は・・・（後書き）

感想よろしくお願いします

退院

１週間後、蘭に退院許可が出た。
コ「よかったね。蘭姉ちゃん」
蘭「ありがとう。コナン君。」
そんな会話をしていると
医「なにかあったらきてください」
小「お世話になりました」
と、言って車に乗った。

車に乗って３０分。毛利探偵事務所についた。
蘭「ここは・・・？」
コ「蘭姉ちゃんの家だよ」
蘭「そうなんだ。」
小「入るぞ。」
と小五郎に連れられて入って行った
小「ここがお前の部屋だ。」
蘭「ここが・・・あれ？この写真に写ってるのって私と・・・？」
小「ああ、そいつは工藤新一だ。」
蘭「工藤・・新一？」
コ「覚えてるの！？」

退院（後書き）

なんか映画でそんな会話があったような？
気にしないでください。
夏休みだ～

「かえらない」記憶

蘭「ううん。でも、なんか胸が締め付けられるような・・そんな感じがするの」
コ「そっか・・・」

それからコナンは、阿笠博士のところに行った。
阿「そっか。蘭君がのう。」
灰原哀は黙ったままなにかを考えているようだった。
そして、
哀「工藤君、今すぐに蘭さんをここに連れてきて。」
コ「？　おう、わかった。」
それから、２０分後蘭を連れてコナンが戻ってきた。
哀「じゃあ、まず、血液検査をするわ。」
コ「なんでだよ？」
哀「蘭さんは薬で記憶を失った可能性があるわ」
コ「まじか・・・頼む」
そして蘭を連れて地下室に行った。
１時間後、灰原が出てきた。
コ「どうだった？」
哀「ビンゴよ」
コ「えっ？」
哀「この薬は、私が作った薬よ。私が解毒剤を作らないかぎり記憶が戻らないわ」
コ「作れないのか！？」
哀「ええ。アポトキシン４８６９と同じく、情報がないからね。」
コ「まじかよ。」

「かえらない」記憶（後書き）

なんか、大変なことになってきましたね～
これからどうなるのでしょう？
感想お願いします

風邪

それから数日変わったことなく進んだ。
変わったことと言えば、蘭が風邪をひいたことだ。
コ「蘭姉ちゃん、大丈夫？」
蘭「うん。心配かけてごめんね。コナン君」
コ「いいよ。でもなかなか熱下がらないね。」
そう。蘭が熱で倒れたのは、三日前。それからぜんぜん下がらないのだ。
蘭「私は大丈夫だからね」
と、全然大丈夫しゃなさそうな顔で言う。
コ「（そんな顔で言われてもな。やっぱり記憶がなくても性格は変らないんだな。）」

それから5日後蘭の熱が下がって、やっと起きれるようになった。
でも安心したのもつかのまだった。

免疫力

コ「蘭！？」コナンが叫んだ。なにしろ、学校から帰ってきたら蘭が倒れていたのだから。
コナンはとりあえず蘭をベッドに運び、それから
コ「灰原！すぐにきてくれ」と頼んだのだった。

２０分後
哀「やっぱり・・・」
コ「何がだ？」
哀「蘭さんが飲んだ薬には免疫力が低下する作用があったのよ。」
コ「免疫力を低下する作用？」
哀「そうよ。間違いないわ。」
コ「それで蘭は！？」
哀「わからないわ。蘭さんはもともと免疫力が強いほうだから、今すぐどうとかは言えないわ。ただ・・」
コ「ただ？」
哀「このままだと、風邪で起きられなくなる。」
コ「起きられなくなる！？じゃあ、蘭はこのまま寝た切りの状態ってことか？」
哀「ええ。このままだといずれかそうなるかもしれないわ」
コ「・・・・」
蘭「・・それ・・・・どういう・・こと？」
コ哀「蘭（さん）！？」

同居する？

蘭は体をゆっくりと起こした。
蘭「ねぇ、それ、どういうこと？」
哀「蘭さん、私の言ったとおりよ」
蘭「えっと貴方は？」
哀「私は、灰原哀」
蘭「あい・・ちゃん？」
哀「さっきの話に戻るわ。それで蘭さん、私と一緒に住まない？」
コ「はあ！？何言ってんだよ！？」
哀「あら、わからない？これから蘭さんには、私たちと同じ立場に立ったことになるのよ？こんな危険なことに蘭さんが耐えられると思う？それに、一番苦しんでいるのは蘭さん自身よ。」

コ「それは、分かってるさ。でも灰原お前、ここに住むのか？」
哀「何言を言うのよ？蘭さんが博士の家に住むのよ。そうすれば、私や貴方がいない時でも安心でしょ？」
コ「でも、ここでもおっちゃんがいるし・・」
哀「何言ってるのよ？あの人は名探偵よ。いつ家を空けるかわからないじゃない。」
コ「わかったよ。」
哀「じゃあ、博士を呼ぶわ」
蘭「ちょっと待って。今から行くの？」
哀「ええ。そうよ」
蘭「じゃあ、荷物まとめなくちゃ。」
蘭はベッドから降りて立とうとしたその時
「きゃっ」と言って倒れてしまった。
コ「蘭姉ちゃん、大丈夫！？」
蘭「ハア、ハア、大・・丈夫・・よ。」

哀「蘭さん、荷物は私がまとめるわ。だから無理しないで休んでて。
」

それから１０分後博士が来て、３人で阿笠宅へ向かった。

同居する？（後書き）

こんにちは。これからどうなる？！コナン。
駄目文ですが読んでくれてありがとうございました。

悪化（前書き）

誰が話しているかはわかりますよね

悪化

蘭が博士の家に居候してから、1週間がたった。
蘭はまだ、熱がある。
俺は毎日会いに行っている。
「蘭姉ちゃん、大丈夫？」
「コナン君、来てくれたんだ。私は大丈夫よ。」
「そっか。よかった。」
というのがいつもの会話。
だけど今日は違った。
阿笠邸に入ったとたん空気が違うのに、気がついた。
「江戸川君、蘭さんの容体が悪化したわ。」
「どういうことだ！？」
「ごめんなさい。私がちょっと目を離した隙に倒れていたのよ」
「それで、蘭は！？」
「今は、落ち着いているわ。」
「そうか・・なあ、病院にいったほうがいいんじゃないか？」
「駄目よ。行ったら例の組織のことを話さなければならないわ。」
「そうか・・・じゃあどうするんだ？」
「私が薬を作ってみるわ。」
「そうか・・・」
俺は黒の組織をぶっ潰す。
そして、蘭の記憶を取り戻す

気持ち

病院で目が覚めた時誰か分からなかった。
顔は知っているんだけど、名前が分からなかった。
そして、家に帰ってみたら、いきなり倒れて、みんなに迷惑かけて、
どうしたらいいの？
哀ちゃんによると、私の記憶は薬でやられたらしい。
でも、思い出そうとしても頭痛と吐き気がする。
なぜ？
なにか、思い出したくないの？
それが怖い。
「蘭さん？どうしたの？」
哀ちゃんが心配して聞いてくれた。
「ううん。大丈夫よ。」
みんなが心配してくれてうれしいけどなにかちがう。
それはなぜ？

気持ち（後書き）

すみません＞
ほんと駄目文で。

心（前書き）

蘭は、阿笠邸でボーとしていた。
（私は、ここにいたら、迷惑なのかな？）
そうかんがえながら。
そうしている間にコナンと哀がかえってきた。
「ただいま～」
「おかえり。コナン君、哀ちゃん」
というと、コナン君からは、無邪気な笑顔がかえってきた。
私は高校には行っていない。
なぜなら、哀ちゃんが
「蘭さんは外に出さないほうがいいわ」と
言ったからだ。
私はまた、考え事をしていた。
（なんで記憶喪失になんかなっちゃたんだろう）
そうかんがえると、声がきこえた。

ー蘭ー
「え？」
後ろを見ても誰もいない
「空耳だったかな？」
でもなんかどこかで聞いたことのある声だった。
（貴方はだれ？）

心（後書き）

記憶もどるのか！？
感想よろしくお願いします。

だれか・・・

私はなんでここにいるんだろう？
私はここに居ちゃいけない気がする。
どうしてか分からないけど、たぶん「女の勘」。
まだ何も思い出せてない。
でも、たまに頭の中で声が聞こえるの。
とても懐かしい声で、私は安心してる。
コ「どうしたの？蘭姉ちゃん」
蘭「ううん。なんでもないよ」
コ「じゃあなんかあったら言ってね。」
蘭「ありがと。コナン君」
それから、部屋に戻って泣いた。
（私は心配かけてるだけじゃない！早く記憶を戻さなくっちゃ）
そして私は深い眠りについた。

だれか・・・（後書き）

お久しぶりです。
う～標準語難しい～
関西に住んでいるので普段は大阪弁です。

学校（前書き）

話が動くかも！？（おいっ）

学校

私は今日から学校へ行く。
それは、1週間前・・・

哀「蘭さん、学校に行きたい？」
蘭「え・・？どうしてそんなこと？」
哀「蘭さん、貴方は本当は外に出たいんじゃないの？」
「うん・・でも危険な目に遭うのだったら、外に出ないほうがいいかな？とか考えちゃって。」
「蘭さん・・」
「じゃあ、学校に行ってもいい・・かな？」
「ええ。いいわよ。」
「やった～ありがと。哀ちゃん！」

ということで、今日から学校に行く蘭。

クラス
「お～毛利！久しぶり」
「ら～ん。あんたどこいってたのよ？」
という声がｊ次々にあがる。
？「蘭はいま、記憶喪失なんだよ。」

学校（後書き）

感想お願いします

久しぶり！

「工藤！？」
「なんでここに？」
「復帰したのか？！」
「どういう意味だよ」
という質問が次々と飛んでくる。
声の主は、工藤新一。
「言ったとおりだよ。１週間だけ来るから、まだ復帰とまでにはいかねえよ」
「でも、新一君。蘭が記憶喪失だっていうのは本当なの？」
「本当だよ。」
「そんな・・・なんで？なんでそんなことになっちゃったのよ！？」
「それは・・・言えない。」
「どうしてよ！？」
「俺が関わってる事件に関係があるんだよ」
「わかったわよ。そのかわり蘭に何かあったらまもってよ。」
「あたりまえだろ」（守ってみせる）

久しぶり！（後書き）

なんで、新一が！？
それは次話で分かると思います。たぶん（おい）
感想や指摘お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7056s/

ずっと

2011年12月11日21時51分発行